

<書 評>

大野智也（身障者雇用促進協会）

はたらく障害者

大川嗣雄（横浜市）

この本の著者の大野智也氏は、長い間日本短波放送で福祉や医療の番組を制作して来た。その成果は、日本民間放送連盟賞を4回受賞するなどめざましいものがあった。しかし、その後ミイラ取りがミイラになってしまい、現在は身体障害者雇用促進協会に入り障害者の職業問題を専門としている。

この本は著者のおそらくジャーナリスト時代に培われたであろう広い目と、職業問題の専門家としての視点の深さが巧みに組みあわせられ、読者をひきつけ考えさせる本になっていると思われる。

本は「はたらく障害者」と題されているが、第1部の障害者の雇用と就労とルポルタージュで構成されている第2部のひらかれる障害者の働く場の二部に分けられている。

第1部はさらに障害者雇用のすすめ、雇用促進法が改正されて、障害

者の社会的自立と就労する章にわけられている。これをみてもわかるように、第1部では障害者の現状から、現在の法体系、障害者の職業問題に対する今後への展望などが盛り込まれている。とかくこのような話題は固くなりがちであるが、著者は日本の現状を具体的にこの章の中に取り込み、大変読み易くさせることに成功している。障害者の職業問題に関心を持つ全ての人達にとって、教科書を読まなくても、気楽に読みこなせしかも大切な問題は十分に理解することができると思われる。

第2部のルポルタージュは、札幌から大分県の別府市までの広い範囲から13カ所の事業所の様子がのべられている。どの報告も、雇用者側からの目と、雇われている障害者の立場と職場を取り巻くいくつかの話題がとりあげられている。いかにも放送ジャーナリストらしく、どの報告

も一場の放送劇を読んでいるような楽しい読み物となっている。いずれにしても、障害者の働く場が日本中の至る所に拡がっており、各々が素晴らしい成果をあげていることに驚かされる。

このルポルタージュを我々のように医学的リハビリテーションに携わっている者の立場で読むと、障害者の雇用される条件、困難な条件にもかかわらず働いている障害者自身の資質などが明確に伝わってくる。この辺がリハビリテーションに係り合っている人達全てが知らなければならぬことであろう。

著者は、本の中で理解よりふれ合いを強調している。また、専門的知識より実践をと、のべている。しかし、今後の障害者の職業問題は、重度な障害者との対応を迫られている。このような状況で障害者の第1線のリハビリテーションに係り合っている我々はどう考えれば良いのであろうか。このような点についても著者の今後の活躍と発言を期待したい。

（A5，頁222，1982，¥1,400，ぶどう社刊）